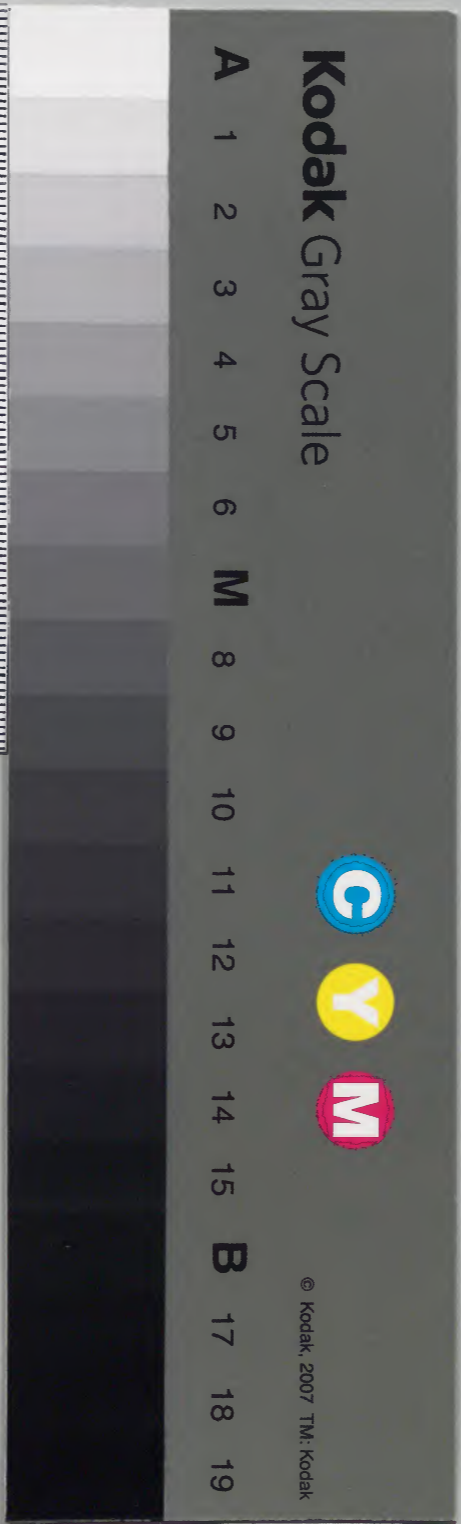


成田遊進起戴

				和書門類
		八六七七		
	九	五	函	
四	冊	架		

庫	文	閣	內
五		八六七七	和書類
二	四		
七	冊		
架			

內閣文庫	
番號	和 8677
冊數	4 (2)
函號	177 1041





釋日本紀十二の卷。上
 仙覺抄十六の卷。上
 丹後風土記の歌。上
 古非阿佐。上
 遠礼波。上
 とさゆみお戸と開せこれ
 たり。堀川百首。上
 和名抄風雪部。上
 早霜也。和名八豆之毛。

相馬日記二

相馬日記卷之二

東都



香菴文庫

廿二日。此國のふるたのふもたつね
 んとて。三思のち。順行。傳四郎。五本田
 勸兵衛。若林金五郎。ひびぐ。ていつら。
 水海道の。て。て。て。て。岡田郡

一

下総国岡田郡飯沼壽龜山
天樹院弘經寺ハ應永廿一
年七月嘆譽良肇上人草創
也。横曾根城主羽生彦八郎
經貞羽生、城主渡部豊前守
吉定ホ、檀越として建立せ
し。寺記云、國花万
葉記、十ノ壽龜山弘經寺。淨
土談林。飯沼立寺領二百三
十石云。倭漢二才圖會六十
六の卷の中にも。

横曾根村より。無量山安養寺。
觀音山法性寺あり。ゆるぐらめらり
て。飯沼の壽龜山弘經寺より。青
門。まろきまら
あとの松杉及びともさみく。あを
青
りよとつらうらうらう中。名号櫻
のうら紅紫しく。所くは抄ひま
らるるまえもいそげ。名号櫻しく
りえまらるる。うら
祐天僧正の六字の名号書進し
とらうらうら。そのむらうら奉らる

和名抄田園部。漢語鈔云。
水田古奈太。
和名抄田園部。續搜神記
云。江南、烏種豆。自一曰陸田。
和名八六。又玉篇。且反。
耕也。地也。唐韻。曠。耕田。雅。日
本紀師說八太也。

嵯峨親元日日記。文明十
三年七月十日。大内殿より
掛繪列來云。負徳文集。三
幅掛畫云。

相馬日記二

探ありといふ。むらうら此らうら
飯沼とて。縦横。あうら許
派ありしと。中ごろらうらうらうら
許多。水田陸田
とらうら。和名抄は飯猪とらえ
此処。お字。あま字
とらうら。措らうら。儲らうら。の
備とらうら。なるらうら。羽生村
の羽生山法藏寺より。果。所由
とらうら。掛繪ありて。僧が

二

近世奇跡考ニ羽生村より代々極越与有る云々

繪とくまきとらうとまきくよ。中あつとらよ
^恐 事 門 入
^傍 右のりつる。百姓與右あつが代々の
^{卒都婆} 石 卒都婆 並
^並 ざつとらふみまき。そが中りま
^並 が法名ハ。歸真理屋性貞信女。兼
^{應二癸巳天八月十一日。助童は。單到}
^{真入童子。寛文十二壬子天四月十}
^{九日。菊は榮譽不生妙槃。と}
^{て。とらふ年月とまらさげ。與右あ}

が家の過去帳。榮譽妙槃比丘尼
^{享保十五戌天五月三日。とらえ}
^{ゆく} 祐天僧正の。とらえし
^{て。過去帳とらえし。くまが法名と。}
^{理屋松貞信女。八月十一日と}
^{阿弥陀佛の名号の。くまが}
^{ハ。理屋照貞。禪定尼。寛文十二子年。}

三月十日とつゝえんて。あはとりとと
違 最 不審 熟 彼
はぐるまのつとくひぶう。はくく
按 石 卒都婆 ちりや
押りのま。しぞとらまの養應二
累
年八月十一日とあり。あはつひが我
ととくしとて建たれげ也さて僧
奉りけり
正の教化よりりて寛文十二年
三月十日死矣得脱せし時法名
のしととらるるく照貞と
改 應 好 字
はくくあ。ちがてその年月と書

累が由未と記せしが死矣
解脫物語とて二巻ありと
くさなるひあふし。新著聞
集五の巻。祐天大僧正傳。か
とよえんてを實説と云
べし。
和名抄男女部。釋名云。無
妻曰鰥。和名夜毛乎。

相馬日記二

加 賜
あはとりとつとくひぶう。あはとりとつとくひぶう。
最 以前 殺
あはとりとつとくひぶう。あはとりとつとくひぶう。
卒都婆 同
助童がそとらるる。あはとりとつとくひぶうの四月
十九日とあり。あはとりとつとくひぶう。あはとりとつとくひぶう。
鰥 怨矣解
脱の時建たるるがゆゑあり。そとくひぶう。抑
累 由 縁
あはとりとつとくひぶう。あはとりとつとくひぶう。
聞 今ハむり下総國岡田郡
あはとりとつとくひぶう。あはとりとつとくひぶう。
羽生村の百姓。あはとりとつとくひぶう。
鰥 夫 郡の横

四

和名抄男女部。釋名云。無
失曰算。和名夜毛女。

うこそん空徳物語の歌よ
めりこそこの片羽よよみ
うけり。されど旧本今昔
物語は片輪者ときき。砂石
集は車の片輪るうと
ゆもりひとと。雨かよ分得
て。彼と和の通音ゆと
と和之流とも。波之流とも。
古書よあたる例ゆと。此
語もあたる加太波とあて
るの片羽あたるゆととけん
よ。後よ通かして。加太和とも
あつり。車の片輪の説
いれらるるやと。されど

仮字に加太波とあて平と
とをきり。

崇神紀。明年クルトシ云。

和名抄病部。飽瘡此間云
裳瘡云。續日本紀十二の
巻。天平七年。自夏至冬。天
下患腕豆瘡。俗曰裳瘡云々。

相馬日記二

曾根村にさめる中らぬの男児一人

とむ久とらうて。妻と一け

るが。その児がう海うらちるまよ

て。女よたるとんかたさるうさめ

なりりま。友右弟のめらぬあ

とめがうさ。此児らとんぬ。妻

ともさうてんとむづうらるま妻

思ひぬひて。慶長十七年とらふと

の四月十九日子。らぬとらふとら

行。涪川のぬの横堀へ歩らぬて

あろしとらう。らるが年ハむら

あ。若とど助とあんひらる。友

右弟らそのとらうせらぬめ。あ

びりとな。むらまらるてこ

らう。ららうら。妻とらみ。女

とらあり。その客貌助よつむらぬ

とあらうら。そのあま。とらぬ

ありぬよ。えらひて。顔らぬ

五

類聚国史百七十三の巻疾疫の部。日本紀畧扶桑略紀、平家物語一の巻殿上の巻、空德物語俊茂上。一世の源氏の公。蜻蛉日記上。源氏物語明石。又曰有吉田、連老字、曰石麻呂。今の俗祢の字と異なる。又曰有吉田、連老字、曰石麻呂。今の俗祢の字と異なる。

掛川地蔵記上。六十六部同因之經聖、貞四年条。六十六部寫經供養云云。奇異雜談集一。律の因の聖及一人名藤坊云。日本六十六ケ圖と修行人云。塩尻五の巻。六十六部回因順礼のりつと也。又曰有吉田、連老字、曰石麻呂。今の俗祢の字と異なる。

抽みどりの皮模様。りろろ

漆塗

如くまらく。あく

心魂

まをびらちろるあろがまし

あろりり。それが名まらるのとい

る。世の人の助がくもまらるる

来。まらるる。字とまらるる

まらるる。然片輪め。女なまらるる

まらるる。實。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

まらるる。まらるる。まらるる。まらるる

景行紀四十年。姦カタリ
云。推古紀十二年。新者カ
タマレキヒト云。孝徳紀大
化二年。新カタリ云。

和名抄田園部。豆田。日本
紀私記云。萬女不。

源氏物語、紅葉の實よ、の終
ら終る。くく。むら云。同東
屋よ。の終る。の終る。の終る。
又き。ゆら。の終る。の終る。
と。の終る。の終る。源平盛
衰記廿二の巻よ。の終る。申
云。古今集、序よ。の終る。申
の一時。と。の終る。云。

相馬日記二

暫^{ちか}住^ぢみあつらふ。あつらふが
わくて志^{こころ}を。貌^{かたち}の。まらけと
心^{こころ}の。まらけと。貌^{かたち}の。まらけと
疏^そらみえ。いづく。此女と殺して。
好^{この}ま迎^{むか}へ。と。思^{おも}ひあ
ね。比^ひ美應二年八月十一日の正
あつらふ。右忠の妻のうらみとあは
宿川の。まらけとある。ゆめあめの豆と
り^りは。行^ゆちり。と。妻^{つま}は。刈^{かり}豆と重^{かさ}
荷^かは。志^{こころ}を。め。脊^せ負^おせ。美^みへ。輕^{かろ}荷^か

負^おひ。日^ひの。まらけと。まらけと。まらけと。
よ。妻^{つま}重荷^{おも}まらけと。まらけと。いづれ。若^{わか}夫^{とこ}は
自^{みづか}ら。煙^{かえり}荷^か負^おく。我^{われ}の。まらけと。
重荷^{おも}あはせ。まらけと。まらけと。いづれ。
よ。右忠の妻のうらみとあは。暫^{ちか}思^{おも}ひ
申^{まを}け。川^がと。まらけと。あは。我^{われ}の。まらけと。
あひて。申^{まを}んと。まらけと。まらけと。まらけと。
の。まらけと。宿川の。西の。まらけと。
上^{かみ}に。飯^{いひ}沼^{ぬま}の。弘^{ひろ}経^{けい}寺^{てら}の。まらけと。
七

近世奇跡考ノ二ノ与右弗つ
完テウラウニシテ二町余
法藏寺一同云々

新古今夏西行及のよ清
水がたけ押がけとて
とと立とまうつと

へと申す
と經て羽生村より。此処
近邊
のちりりり。わらりり人あはれと見
極
て。夫らうらうらと
落
て。中ちやまらしつやとと。
續
はびりてとびりり。とらふさふさありて
あ。目の中口の中へ砂とかけ
讀
る。殺
助童が母のうめは沈む所
その時報恩寺村の清右衛門といふ

この行ゆアア。柳蔭
窺
うらひさる。与右弗つ
もさうざうけり。かくて与右弗つ
子あつ。妻のうめはめま
水はあがとと披露。羽生村の
法藏寺より。歸真理屋
性貞信女兼應二癸巳天八月十
一日とあり。石塔と
始
終
略
知
者
ととめとつとほとるのありと

新古今釋教。寂蓮。いひぬ
 びつら母もつらひ人のつらさを
 承いふまにわつらふまにひ

ひとども。うさ徳が所縁 絶たえそあるり
 ちまひ。とくりよとあるく止中みよ
よええん 本意遂
 りり。与右弟つひあつとげくその
あひま 合
 家と押願し。ひよらあへた妻と
重
 めまうらうらうらうらうらうらうら子
無 早 最末
 あくしそ世ととあうらうらうらとととと
迎
 ちむらうら妻一人の女とらあり。とと
名
 と菊とたぐく。菊が十三日ありら
せん
 と。寛文十一年八月中旬せんむらう

此母もまうと身死中らうら。此十年の
いり
 十二月むらうら。与右弟つ後妻の
と
 甥あり。金五郎といらとむと婿
 中らうら。家とほがらめんとは。聖
く
 年正月より菊病よ犯さるて。例
あ
 らうら頻あらうら。廿三日よ口より
泡
 らうらを吐め目とらうらして。父
よ
 与右弟つとめらまらうら。これ
と
 廿年と。縮川の心あてらぬ和主

相馬日記二

九



飯沼
寺



村田春海翁訓。わんわん
 毎むと同語ゆて恐るる

を云ふ。按よ。のまゝに
 りやうして軍也。

祐天大僧正傳拾遺。寛文
 年中。尊者少時。遊學總州臥
 經寺。村民少女。其名曰菊。爲
 怨鬼之所逼惱。苦痛相狂。不
 忍見也。師性誦經稱佛。懇懇
 回願。怨鬼未去。時師卒。出屋
 外。仰空高聲呼曰。十劫正覺
 阿彌陀佛。以天眼見之。以天
 耳聞之。夫九劫思惟發覺。世
 願曰。極重惡人。無他方便。唯
 稱名字。必生我界。今既無應。
 誓願虛設。靈山世尊。亦知聞

相馬日記

殺ころさす。累かさねねあ。寂さび後ごれ
 能能知知。法ほう恩おん寺じ村むらの清きよ右みぎ衆しゆ
 もよくまじり。そのうらみとむく
 爲爲。様さま々々
 口くち放はな。罵ののり。生なま。心こころ
 恐おそ迷まよ。實まこと。父ちちは衆しゆ
 逃にげりて。再また頭かぶ。出でる
 保たも人びととまじり。聞き。恐おそ。村むら

長なが。告つ。名な色いろの三さん郎らう
 龍りゆう舟ふね。年とし寄よの庄むら右みぎ衆しゆら。相あひ
 議ぎ。醫い師し。陰かげ陽やう師し
 中ちゆうひて。とめく。とほくせ
 遊あそ學まな。居ゐ。率すべ。来き
 と聞きて。同どう侶りょ二に三さん人にんあ。母ははとて
 經きやうとよみ。十じゆ念ねんとよみ。授まかず。なご

之尔六八願。自勸證云。我見是利。今既無驗。是見何利。恒沙諸佛。舌相證明。不足誠實。若我所言。有取謬錯。違余剛神。碎破我首。若夫稱名竟無功驗。我今捨戒還俗。學外道法。破滅佛法。言畢。更復至誠念佛。於此。冤鬼忽於小女安泰。此乃深信徹到。所致諸佛所說。諒不虛矣。

け。教化ケしめくも。物の怪モノノケなり。立タちまひ。時師トキシ屋ヤの外トは立タちまひ。空ソラを仰アゲぎえ。高タカく呼コエぶ。正ただ覺覚の阿彌陀佛アミトブツ。天眼テンガンを見え。天耳テンニと聞き。五劫ゴキョク思シ惟ただし。超こ世この願と發す。方カタ便べん唯ただ稱ネ名ナ字ジ必かならずく知ん

生ナマ我われ界カイの既今イマも應なく。誓セ願ガハシむす。靈レイ山サン世尊セソも亦聞クけ。六八ロクハチの願と示す。自ミづ勸コト證シす。見ミ是コト利リ今イマも驗なく。是コト何ナニの利と恒沙コトの明諸シヨ佛ブツ舌ゼツ相ソウ證シす。誠マコトと金剛コウ神ジン我われも金剛コウ神ジン

我首 砕
 若夫 若夫 志 名 竟 功 験
 我 我 戒 破
 還 外 道 学
 佛法 滅 罵
 而 本 眠
 有 頭 邊 念 佛 救 千 遍
 佛 菩 薩 納 受
 寛 鬼 忘 去

菊 病 始 愈 師
 改 贈 阿 弥 陀 佛 の
 名 号 の 理 屋 照 負 禪 定 尼
 寛 文 十 二 子 年 三 月 十 日 と 書 て 菊
 賜 右 衆 子 奉 持 せ け け け
 あり。 菊 が 病 本 復 せ け け
 あり。 朝

挂川地藏記。懸字云。負
 徳文集。掛字二幅表具云。

らあ。うきが寛鬼めてさよらあべい。
 うき結がらるされあもあかド
 所めてらそゆへ。うき悪縁あう死
 者共もみてうきふらあえん。あか
 抄そろしくと舌と巻ん中け
 此を。師うちうなぶうせはあひて。
 中ぐに單到真入とりよ法名抄りせ。
 十念とさぶさうたあひあられ。あか
 鬼なるうき離さく。菊が病あどろなく

癒のちよえん後与右形も過とそい
 てわら抄り。西入といひて一心
 念えんがらあまう念佛称名。延宝四年とりよ
 ろの六月廿三日は往生とそい。
 葉もあま尼なえんとあひゆうせ
 を。さく父のあさぐとえなん
 ぶとて。師めさぐちよさめたあひ
 ちとて。せんよとあきてあつらふ。
 子孫あまとそい。かとも出来て後享保

景行紀十二年。強子かす

相馬日記二

十五年とりよりの五月二日。
 齡七十二めて身まうりぬ。石ぞと
 ころよ栄譽不生妙槃とあり。過去
 帳に栄譽妙槃比丘尼享保十五
 戌天五月三日。とあり。主人
 なるあり。松屋のやのあり。とあり
 と過るとりよある歌。
 ころあささとあり。流 語 累
 川のながるはるの可もむくまのあはる。
 如此 偈

抑累や助童が死とあり。慰
 が病と救めいー祐天大僧正とま
 らる。陸奥國岩城の人めて。父と
 新妻重政とりよ。千葉氏の苗裔
 たり。父母とごり子ありとあり。憂
 へ。毎月廿二夜の月を立待
 折とあり。ある秋その母の夢
 子。月庭中の樹より降り。地藏菩薩
 薩如意珠と授めよとあり。娘。

能因哥枕よ。十七日ならん
 云。色葉集天象部よ。なら
 中ら月云。新撰六帖よ。家
 川とあり。とあり。とあり
 とのころを立待の月よ
 ありん。

寛永十四年とりよりの四月八日
 師とらあり。師年十二生。江戶芝之緑山なる他徳院の休波ちとくわん師が許しす中道。休波師まろことて愛ま奇之ま阿あやふと山まの名おのな通と檀だん通と上人おんじんのおんじんををたたふとふびびん。遂つひは薙は髮げすすりりめめん。祐すけ天てんと名なづくづく。上かみ人にん子こ徒たでで冥みやう西さいの善ぜん導どう寺じ。下げ総そうの弘くわん經ぎやう寺じ。鎌かま倉くら

の光明寺くわうみやうじ。ななどどは遊あそ學がくせせるる。脩しゆ川がわの怒いか吳ごと教ま化げししるる。弘くわん經ぎやう寺じは母ははををりり時ときのよららめめん。齡とし廿に六じゅうはるるををめめるる年としあり。後のち三さん緑りよく山さんは帰かへり。道みちををみ。學まな成ぶ徳とくととら。臘ろう滿まんととりりどどもも。檀だん林りんは住ぢゆう寺じせんぜんととをを不ふ欲よく。孫まごががららびび。葛くわ柿かきの牛うし島しまよりよりををままみみて。ああままの年としををままひひぬぬ。そのそのあありりどど佛ぶつ号ごうと書かききままししと教まととままるるべべ。その

徳海内とくあいのうちよきまきみり。遂つひに中ちゆうんと
 命いのちすに母ははをせりて大巖寺おほいそ弘経くわんけい
 寺てら傳通院でんつういんなるに任まかせし。正徳せいとく
 元年げんねんとりよと。三縁山さんえんざんの大僧正おほいそ
 進しんよきみり。山やまと治さめよと四年しよんねん
 ありて。その老衰らうさいより上かみとまう
 麻生あさぶの里さとよのぐれとまう。享きやう
 保二年ほにねんと云いふ。の其籠そのかご土つちの里さとよ
 今茲ことごと七月十五日しちがつにじふごにちに。齡とし

源氏桐壺げんじとうがよ母ははの方かた。あひ
 百番歌合ひゃくばんかあひ取替波也とりかへなみ。権中ごんちゆう柘せ
 大臣おほし上の歌うたよ。近山ちかやまの
 惟ただらふんふんとんとんとんとん。

八十二はちじふに。其臘そのろう七十年しちじゆねんみりて。煙えん
 此こゝほりほりのひぬ。天下あめのうの性靈しやうりやう僧正そうせい
 の徳とくと仰おほままひて悲歎ひきたんなるなり。
 師生ししん涯えんの道功だうこうさるりといとどもも。
 不ふくく忌諱いみの係由ゆ多た。本傳ほんでん
 譲じやうの脱之の上かみの條の
 緒川おのがわの怒いか矣やが解脫げだつの由ゆ縁縁
 祐天すけん大僧正おほいその事實じじつよいとまま。
 悉實しつじつ録ろくと考かうるるを合して記す。

菅原系圖よ○道真

高規
寧茂
景行 常陸介
二人

浮説
再々弘經寺の若と徑て大生
郷の天滿天神より別當と松高
山大生寺とり。撞の録少。下総國
トヨダノコホリイヒヌマンサトノオフノムラニアリフルキテラ。
豐田郡飯沼郷大生村有古梵刹
命号松高山梅前院明曆四戊戌
年八月下旬吉辰とあり。天神
の御三郎子ある景行朝臣常陸
時夢のさとし有り

續世繼七の巻。覺裏法印
とて。法性寺殿の仏のよく
よとのまをめぐりぬらへも。
そつともめきくぬらへもな
るべし云。
夢窓國師休草よ。しもの紫
よみく自夢のたつたぬら
らへもめきくぬらへもな
らん。
倭漢三才圖會六十六。聞
光寺在豐田。攝曾根村。東派
開基性信房。性信姓。大中臣
常則鹿嶋郡人。俗名與四郎。
性強勇。而號惡五郎。元久元
年。月十八歳。詣紀熊野
而出京。於是法然上人在吉
水説法。偶聽之。謂上人云。性
信。還下於下總建寺於豐田
左飯沼。號報恩寺。其處有沼

相馬日記一

鎮座
始ていしひまららと一神社なり
とつり。むり親寫上人のまらと
性信坊といひ。此飯沼のあり
寺と建て。一向宗の法門とあり
めらとある。天神隨喜ありて紫
の戸帳と性信坊が袈裟此料子
とてたうび。すこ毎年の正月十一日。
飯沼の鯉二隻ばあつととありと
ん。此例より。今も此里の門徒

淵理之營寺。善沼有大蛇。變
 女來曰。沼理我無往處。請往
 門前。淵也。性信不聽。彼女深
 在成大蛇。太行于常州。又
 同年十一月七日。翁來。聞法
 隨喜曰。我是飯沼天神也。爲
 師永可擁護焉。天福元年正
 月十日。祿宜何某夢告曰。爲
 師恩以御手洗池。鯉。早可贈
 報恩寺。努力忽違也。乃捕鯉
 與一頭贈之云云。

より正月十一日。鯉二隻と淺草の
 報恩寺へ進進まわすことなり。
 中むの乱。小田原の北條氏
 の軍らふとてあつて。下書の
 城め。多賀谷修理大夫と戦
 時。社頭兵變。多賀谷氏を
 焼くを。多賀谷氏を再再修
 理まわらせし。神橋の圍手は
 擬法孫子。多賀谷氏が姓名とあり

古今集。爲一。郭とかなく。こ
 月のち。あま。あまもあま
 ぬ。あま。あま。あま。あま
 集。恋。四。近衛右大臣。あま。あま
 の。あま。あま。あま。あま
 と。あま。あま。あま。あま
 頭注。密助。上。あま。あま

なるも。古。縁起な
 とも。別當の法師
 が。強顔
 ざり。此。遣
 ろり。合。渡
 なる。暮。文。目
 探。不。別。栗。刺
 ろ。小。石。の。い。が。る。ど。

拂拭おとけく。龜の甲貝
のうらと心。文をたおはま
か。い。のめ。のめ。まね
ぬのめ。かどりのうら。い
ふ。い。え。え。れ。うら
時。先文と同じものえ
うら。と。う。と。う。み。あ
う。う。の。は。ま。い。い。
い。う。ひ。う。な。う。め。い。
其。お。の。と。が。こ。の。め。い。
ま。う。と。う。り。う。と。い。え。
和名抄。菓。具。部。栗。刺。俗。云
久。利。乃。以。加。

枕草子春曙抄七よ。みさう
人のとことと女わらけくま。

史記三皇本紀は神農氏
始嘗百草始有醫藥云。

不意 踏付 申すもなぐらふつけ行ぞとびい
まや、若林金五がりと臆病め夜
道と押さうらうらうらうらう人くうら
いぐうて。何 何 ちうがれおえい
度化 物 んぐ多のもののとぶるなど。あま
聲 言 ぞ急よするていひちうふ。身もひあ
らうらうはあがみちうらひ。人の間り
立ち。震 歩 ちて。あうくめむもとう。今宵
本津氏が家うて、徒然草のとん

釋 才 とせしよ。ぞえあふとさう也。片目
不聞 とととる もりぬ男女まで。居しけで。身と
頃 聞 ちてふもきく。朝 め 廿三日め。うらう雨そけう。人一日
由 講 徒然草のあうざちせり。神農
の ひと 賢と人のとさう。掌 よ 州北根々木の皮なめや虫と
救 事 ちうふとさうとちちとひえい。得
奇 味 ちうふとさうとちちとひえい。得
く 味 ちうふとさうとちちとひえい。得



神功紀歌子... 弥生阿... 日本紀廿三... 神是造酒神也今有其遗迹云。

袖中抄一... ちの國の... ありては...



不飲... 御神の... 焚... 兼... 強... 思比...

とらら語... 西乃... 民... 養... 朝夕... 誠... 習... 大柳... 教化... 厚...

神奈根哥。与毛也万乃
 一乃万保里仁須留俣
 占中行事秘抄中未
 日保里周の条。跡乃万々
 仁加多万保利万ツレ云。

依
 此土浦の近き所と云。糟乞村の名
 主儀を奉るといふものあり。三思が
 教とす。治
 あり。ちり。其の村と云。治
 氏子め。不良の行のよのなり。此と年
 田穀のり。不登
 村人。集
 乞とを請やせ。乞の儀を奉る

男のみ。何ともいふことな。過ぬ。
 官。怪
 儀を奉る。不饒
 候。此
 計。合
 各心と合せて請やう。乞の儀を奉る

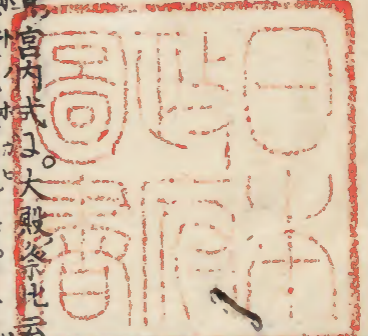
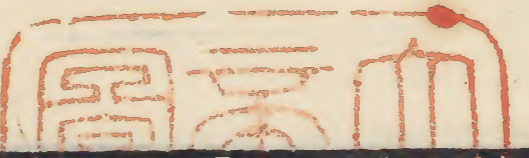
史記仲尼弟子列傳。子賤爲單父宰。正義曰。宋州縣也。說苑政理篇。宓子賤治單父。彈鳴琴。身不下堂。而單父治。巫馬期亦治單父。以星出。以星入。日夜不處。以身親之。而單父亦治云。淮南子原道訓。遽伯玉年五十。而知四十九年非云。駱賓王詩。倅知四十九年非云。

一なりと中ちり。官びと
 感 動
 賜 斯 而
 村内の者ゆき行と正しくし。不劣
 誠は單父の民よの抄らぬ里と
 目覚めたる心地。五十五年の非と
 事と悔て。今身とつ
 與借らるを聞て。送

論語憲問篇。不在其位。不謀其政。

夫木集雜十四信實。又志のまふれむ。とて

てかろけけ御代の抄はんめらみよ
 報奉らんめ抄らぬ思
 然 雖 然
 者 朝 夕
 暇
 道など説諭。或ハ國の御用
 出るどしてん外何とをらせん余



延喜宮内式云。大殿祭也云。於保登能保加比ト云。古事記仲哀の殿。酒樂之歌也云。神功紀十三年。雲井リホカ。通證。保加比祝也云。空德物語。藤原の君。ゆたまたと。舟はく。つら。む。ひ。ゆ。り。り。と。吹。上。る。あ。つ。て。て。た。ら。し。ほ。ゆ。ふ。あ。い。て。二。頭。宗。紀。高。六。山。ツク。ル。ヒ。ト。マ。繼。體。紀。斐。然。天。藻。女。ツク。ル。ミ。ヤ。ビ。云。神名帳。下野国河内郡。二荒山神社云。續日本後紀。文。

徳實録三代實録。がと。ゆ。も。石。室。集。沙。門。勝。道。登。山。水。堂。玄。珠。碑。下。野。國。三。粵。有。同。州。補。陀。洛。山。云。中。禪。寺。私。記。弘。法。大。師。手。登。山。門。題。額。禪。陀。洛。山。突。心。檀。門。云。中。禪。寺。私。記。日。光。山。滿。願。寺。者。林。德。天。皇。御。宇。神。護。景。雲。年。中。當。國。芳。賀。郡。久。沙。門。勝。道。云。始。上。斯。山。新。起。道。場。云。廻。國。雜。記。日。光。山。よ。の。の。く。り。ら。る。又。び。一。二。荒。山。と。い。う。と。な。ん。雲。ま。り。ゆ。お。づ。け。た。う。山。の。こ。の。よ。を。さ。さ。て。う。と。ふ。日。の。か。り。う。れ。和。名。抄。病。部。師。説。嘶。咽。古。路。々。久。古。今。集。云。一。の。ふ。と。も。こ。の。ふ。と。も。め。ら。り。の。ふ。と。も。こ。の。ふ。と。も。の。ふ。と。も。こ。の。ふ。と。も。枕。草。子。春。曙。抄。七。の。雨。ら。ち。か。ら。ら。れ。さ。つ。色。が。白。り。

春此らるむらむらりめり。春の
名と報國恩舎とも知非高とも
みせらるれ。今日よらふべきまらり
なうりりりとぞ押ひあはさる。さそ
大御世ほぐひの歌をほりて
へらら。
君が代にそ急久方の日光山川
照ぬくまなり。日光山は
の各二荒山め。其は男躰

女峰のゆららの荒山かびりさるる
いひちんと。後寺の各みよらら
日光とららら。改。転。此の
ひりりとも道興准后ハヤラレ也。詩
廿三日。ららもりたらしら。ひねめ
講説。その書るどさうみ喉
嘶咽。其の書るどさうみ喉
あうらぎ。よもたあれちりまわらる。
後然。清少納言が
書らんも今いらけら。

